秋田公立美術大学

Akita University of Art

2024

Extra issue

秋田公立美術大学は、社会の大きな変動に呼応し、
古い概念にとらわれることなく新しい芸術領域の創造に挑戦します。
自然と伝統文化に恵まれた秋田の文化的資源を活用し、
芸術のもつ可能性、公共性を探求し、秋田から全国、世界へと、
自らの芸術的感性と創造性をいかす社会に貢献する人材を送り出します。

目次

秋田公立美術大学の卒業生による多様な活動・活躍を紹介します

P6
1羽の鳥が現れただけで目の前が一時停止した物語のように。デジタル写真をサイアノタイプなどの古典技法を用いて焼き付ける。
東京藝術大学大学院美術研究科1年　菅原果歩（2023年アーツ＆ルーツ専攻卒業）

P10
人と人が交流したり、発信を行う拠点となる場所を運営していくことに興味がある。移動式投影機を新屋のまちで投影した経験が原点。
NPO法人アーツセンターあきた　白田佐輔（2023年ビジュアルアーツ専攻卒業）

P14
秋田県南部の里山や北秋田市阿仁のマタギによる伝統的な狩猟に参加しながら、秋田の自然から得た実感を絵に。
画家　永沢碧衣（2017年アーツ＆ルーツ専攻卒業）

P18
秋田市伝統の金属工芸の技術を受け継ぐ、2019年夏に立ち上げられた「矢留彫金工房」。その設立・活動に関わる秋田銀線細工職人。
銀線細工「矢留彫金工房」　髙槇香澄（2019年大学院複合芸術研究科修了）

秋田公立美術大学の教員・学生による社会連携活動を紹介します

P4
身近な地域資源を、外からの視点で解きほぐす
社会連携「にかほ市ジオカルチャー研究プロジェクト〝流れ山〟」
景観デザイン専攻　井上宗則（准教授）

P8
行政と市民が協働するこれからのまちづくり
社会連携「〝北高跡地〟の利活用を考える実証実験プロジェクト」
景観デザイン専攻　小杉栄次郎（教授　学部長）

P12
〝森〟の中で想像力をはぐくむ
社会連携「〝こどもアートLab〟植物ってどんなかたち？　なぞって、えがいて、いけてみよう！」
ものづくりデザイン専攻　瀬沼健太郎（准教授　専攻長）

P16
改修される歩道橋で、地域住民と一緒に考えるアートプロジェクト
社会連携「新屋横断歩道橋補修に伴う色彩デザインプロジェクト」
ものづくりデザイン専攻　柚木恵介（准教授）

P22
プロジェクト「ORAe」が描く秋田のものづくりの未来
社会連携「秋田県内の木工事業者によるプロジェクト〝ORAeアキタファニチャー〟」
ものづくりデザイン専攻　今中隆介（教授）

扉写真：「“北高跡地”の利活用を考える実証実験プロジェクト」第1回「北高跡地に宿泊してみる」より。能代の夜。

社会連携

にかほ市ジオカルチャー研究プロジェクト〝流れ山〟

身近な地域資源を、外からの視点で解きほぐす

秋田公立美術大学
景観デザイン専攻
准教授
井上 宗則

秋田県南部に位置するにかほ市と秋田公立美術大学が連携し、「ジオカルチャー研究プロジェクト」を２０２０年度から実施しています。何名かの教員がそれぞれに研究テーマを設定し、学生も参加してプロジェクトを行っています。私は、にかほ市にある「流れ山」と呼ばれるユニークな地形に注目し、地形を生かした生活空間のあり方を探求しています。

「流れ山」とは、山が大きく崩れ、膨大な量の土砂や岩石が流れることでできた小山のこと。長崎県島原市や福島県の裏磐梯など日本各地でみられ、にかほ市の象潟地区に点在する流れ山「九十九島」は名勝天然記念物に指定されています。一方、九十九島より北に位置する金浦地区や仁賀保地区には、より大きく多数の流れ山が存在しているのですが、このことはほとんど知られていません。この２つの地区の流れ山は、象潟地区と異なり市街地に近接しているために、景勝地として存在するのではなく、日常生活と密接な関係を構築していることが考えられます。

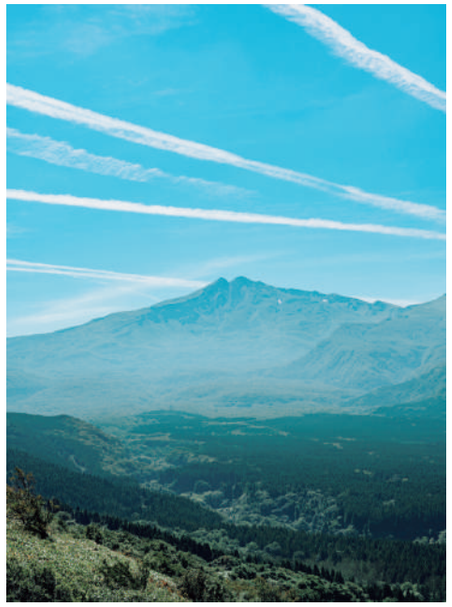
「わからないことがあったら調べる」のが研究。学生５名と一緒に、流れ山がどう利用されているか調べたり、航空写真を使って消失した流れ山の痕跡がないか確認したりしました。ある時、学生の一人がこの一帯に「森」とつく地名が多いことに気づき、地名辞典で調べてみると「森」は小高い丘を意味することを知りました。地名に流れ山の存在がしっかり刻み込まれている。地元の人にとってはすでに見慣れた風景の一部となっている流れ山ですが、こういった調査研究を通じて解きほぐし、地域を特徴づける資源として確立することを試みています。

そのためには、流れ山が作り出す空間を実際に目で見て確かめることは不可欠です。そこで、９月に学生と一緒にフィールドワークを行いました。その結果、流れ山は神社や墓地、展望スポットや都市公園などと、多様な形で利用されていることがわかった。自然現象でできた地形的特徴に、地域の生活や文化が重ね合わされている興味深い事例です。一方、開発行為によって流れ山がどんどん減少していることも事実です。すべての流れ山を残すことは不可能だし、その必要があるとも思いませんが、地域の人が流れ山を地域資源として認識し、壊すか否かについて議論することは、これからのまちづくりを考える上で重要なことだと考えています。

にかほ市の流れ山は、他に類例のない魅力的な存在です。研究を通してこの面白さを多くの人と共有できると嬉しいですね。

「流れ山」を歩き、ひとつひとつを調べるとそのこんもりとした小さな森は、かつての要塞であったり、神社であったり、清水が湧く城や日和山であったり、墓地や畑だったり、現在は避難所としても使われています。

「流れ山」とは、火山が山体崩壊を起こし、膨大な量の土砂や岩石が堆積した時にできる突起した地形のことをいいます。



仁賀保高原最南端の風車エリアに位置する展望台から望む鳥海山（2,236m）。約2,500年前に起きた噴火に伴う「山体崩壊」と呼ばれる山崩れの痕跡を目の当たりにすることができます。鳥海山から流れ出た大量の土砂は日本海を埋め、象潟、金浦、平沢まで広がり、現在の景観が形作られました。

金浦地区、仁賀保地区には、名勝天然記念物である象潟地区の「九十九島」より大きな無数の「流れ山」が存在し、市街地に近接することから日常生活と密接な関係を構築しています。

1羽の鳥が現れただけで目の前が一時停止した物語のように。デジタル写真をサイアノタイプなどの古典技法を用いて焼き付ける。

卒業生

東京藝術大学大学院
美術研究科1年
菅原 果歩
アーツ＆ルーツ専攻
（2023年卒業）
秋田県出身

私たちに隣り合う自然から、日々の暮らしとは関わり合うことのない遥かな遠い自然へと足を踏み入れたことはあるでしょうか。私は、自分の足でその自然の「境界」を分け入っていく感覚とその途中の気持ちの変化を大切にしたいと考えています。そして、その先の景色に1羽の鳥が現れただけで目の前が一時停止した物語のように見えてくるのです。時にそれは本当に一瞬の出来事です。その一瞬を自分の中にお土産としてずっと持っておくためにシャッターを切りたい。これまでの鳥との出会いが私の些細な日常を強く支えているように思います。

中学時代、初めて手に取った日本の野鳥図鑑の「ミサゴ」という魚食性の猛禽類に惹かれ、少しずつ鳥という生き物に興味を持ちました。高校2年の時、父にコンパクトデジタルカメラを買ってもらってから撮影を始め、毎週のように森や田んぼ、海、川に出かけました。図鑑の中で見た憧れを自分の目で確かめるために。

その後、祖父母の家へ行った際、野鳥に興味があるという話をすると偶然にも、祖父もまた少年時代に鳥に夢中になり、自宅の小屋でオオタカやノスリやサシバ、ラガーハヤブサといった猛禽類を飼育していたことを知りました。祖父は鷹匠に憧れ、新聞の記事を見て羽後町や仙台などの鷹匠の元を訪れており、自宅には鷹匠との手紙やはがき、鳥に関する大量の新聞の切り抜きがスクラップブックに綴じられていました。そこから鳥という生き物との間に自分にルーツや繋がりを意識するようになり、さらに強く惹きつけられていきました。

大学に入ってからもなお秋田で撮影やリサーチを続けていましたが、２０２１年の秋、渡り鳥の中継地として有名な山形の離島「飛島」を訪れました。春の渡りの様子もリサーチするために今年の5月、二度目の「飛島」と新潟の「粟島」を訪れ、少しずつ秋田から遠ざかるように移動し、他の地も視野に入れるようになりました。滞在をきっかけに抱いたのが、「私はなぜ鳥が好きなのか。何のために写真を撮っているのか。」という問いでした。それまでのただひたすら鳥を追いかける姿勢が崩れ、野鳥を取り巻く環境にも目を向けるようになり、写すものが大きく変化したように思います。自然、鳥、自分という三つの関わりを意識し、実感しながら外へ出ると景色が全く違ったように見えてきました。

（文・菅原果歩）

個展「分け入る森」

2022年9月24日（土）―10月30日（日）

秋田公立美術大学ギャラリーBIYONG POINT
主催：秋田公立美術大学／協力：CNA秋田ケーブルテレビ
企画・制作：NPO法人アーツセンターあきた

ほとんどの写真はデジタル一眼レフで撮影しているが、デジタル写真をあえてサイアノタイプなどの古典技法を用いて焼き付けることで視覚を物質化し、原初的なイメージを得ようと試みている。自ら制作した写真集や高校時代からの撮影アルバムなども展示。

社会連携

行政と市民が協働する これからのまちづくり

〝北高跡地〟の利活用を考える実証実験プロジェクト

秋田公立美術大学
景観デザイン専攻
教授
小杉 栄次郎

能代市役所でのワークショップの様子。（左）小杉栄次郎教授と（右）井上宗則准教授。

能代駅から徒歩ですぐのところに、通称「北高跡地」と呼ばれる広大な空き地があります。能代市からその利活用について相談があり、景観デザイン専攻によるプロジェクトチームをつくって2020年度に基礎調査をはじめました。

以前から、いたずらにスピード感を優先するような公共事業の進め方には問題意識を持っていました。長く残ることやきちんと使われること、持続可能性を高めるために、これまでの公共事業の決定のプロセスを見直して、行政と市民との協働による施設の運営やサービスの在り方を模索する必要があると考えています。能代北高跡地のプロジェクトでは、市民と行政が一緒に未来を思考する場を利活用の計画プロセスに組み込むこと、実験的に仮設の建築物を増改築することまでも想定し、中心市街地活性化に向けた機運を醸成する思考継続型プロジェクトを提案しました。地元にある美大が関わることで、10年という長いスパンを見据えて語り合い、実験を繰り返しながら進めていくプロジェクトにできると思ったんです。

2021年には市民参加型のワークショップを開催して、北高跡地で取り組む実験的なプロジェクトのアイデアをまとめ、2022年には、その中から「北高跡地に宿泊する」と「北高跡地で展望する」を選んで実証実験を行いました。宿泊するプロジェクトでは、1泊2日で跡地にキャンプ。展望するプロジェクトでは、15mの高所作業車を入れて、展望利用の可能性を探りました。2023年以降も、実証実験を継続する計画です。これらの実証実験を繰り返す背景には、北高跡地の利活用を含め、まちづくりに無関心な人たちにも興味をもってもらうという狙いがあります。

これまで全く関心のなかった人たちが、「何かやっている」という意識を向けるようになることから、まちづくりが動き出すはず。関心をもつ人が増えていくことで、行政と市民の協働が生まれ、ゆくゆくは美大が関わらなくても持続していく形になることが理想です。

プロジェクトには、学生も参加しています。大学内の講義や演習とは異なり、実社会にでて物事がどう進められているのかを目の当たりにする経験は大きな糧になると思っています。時に思い通りに進まないことにも直面しますが、それも現場に出て学ぶ醍醐味です。ワークショップの場に学生に入ってもらうと、自然と議論をファシリテーションする役割を果たしていることがあり、大学での学びが生かされていることを実感します。

（上）第1回実証実験プロジェクト「北高跡地に宿泊してみる」で行われた「箸作りワークショップ」。湊哲一さんによるスギ、ケヤキ、桜などの材を使った箸作り体験。
（下）「北高跡地に宿泊してみる」で行われた「マタギの焚き火教室」。船橋陽馬さんから教わる火起こし。ナガサを使って薪を割り、ゆっくりを火を起こします。

起伏のある道を歩き、まちの成り立ちに触れます。

北高跡地に身を置き、五感を総動員して捉え直します。

第２回実証実験プロジェクト「北高跡地で展望してみる」では、標高18mの北高跡地でおよそ15mの高さから、能代のまちを展望しました。

人と人が交流したり、発信を行う拠点となる場所を運営していくことに興味がある。移動式投影機を新屋のまちで投影した経験が原点。

2年生の時、「アイスが溶けてから。」という番組を友人と作りＹｏｕＴｕｂｅ配信を始めました。ビジュアルアーツ専攻の萩原健一先生の「映像デザイン基礎演習」という授業で、映像が楽しいなと思って。助手さんの展示の記録撮影に立候補したこともあり、専攻に入る前から関わりを築けて、制作しやすい環境だと思い、ビジュアルアーツ専攻を選びました。

専攻の3年次には3回専攻展があり、最初の会場が新屋ＮＩＮＯでした。そこで初めて移動式の投影機に取り組みました。いわゆるメディアアート、デジタルテクノロジーよりは、自分はもう少しアナログなものに興味を引かれます。プロジェクターをスクリーンだけではなくて、映像の内容と映す場所の関連を考え、その延長線上で僕は移動式投影機を制作しています。先輩や作家さんの展示を見ていいなと思った共通点が、場所をうまい具合に使っている、展示が空間を支配している、その場所でやる意味があるものが好きだったんですよね。

卒業生

NPO法人
アーツセンターあきた
白田 佐輔
ビジュアルアーツ専攻
（2023年卒業）
茨城県出身

移動式投影機は全部で4種類作りました。1つ目は、鉄を溶接してつなぎ合わせ台車を制作。プロジェクターはモバイル充電できるもので、電源は要らなかったのですが、映すと光量が弱くてあまり。映せる範囲も小さくて。でも新屋でちょうど小学生の下校時間とダブったことがあって。地域の見守り隊のおじいさんおばあさんも、たすきをかけて立っていました。そこで小学生にすごいウケて。何これ！　って。僕の説明を全部は理解していなくても、まちなかに映像が映っているというエンターテインメント性を喜んでくれたというか。見守り隊の方もすんなり受け入れてくださって。紙芝居をイメージして制作したことを伝えると、なるほどねって。こんなに許容されると思わなくて、寛容だなと。

何かを発信するメディアの運営をやるのは、楽しいです。本や映像もですが、場所で人と人が交流したり、発信を受け取り合ったりする場所を運営していくことに興味があります。都会は情報量も多く、展示やイベントも毎日やっていて、そういうものをすぐ見に行けてうらやましいなと今でも思いますが、自分がそこに住んでいたらと思うと、受け取るものが多過ぎて、発信までいかないんじゃないかな。秋田のようなローカルな場所のほうが、伸び伸びできます。取材するものも探さないといけない。地に足を着けて、自分で歩いて探すのが好きです。

YouTube配信「アイスが溶けてから。」は全6回。アーツ＆ルーツ専攻（卒業）の早坂葉さんと景観デザイン専攻（卒業）の渡邊泰地さん以外は、後輩も加わりメンバーが変動。コロナ禍で授業もなくやる気があり余っていて1度やってみようと。唐澤太輔先生の「粘菌研究クラブ」に出演いただいたり、にかほ市で環境音を録音、五城目で「獅子の歯ブラシ」のパフォーマンスを取材したり。

卒業作品となった4つ目の移動式投影機は土崎港にて投影。体の前方にプロジェクターとメディアプレーヤーを抱え、背中のリュックにはポータブル電源を。投影する位置を自分の体の向きで変えられます。背負う重さも分担でき、辿り着いたベストな形。

（上）3つ目の移動式投影機です。初代の鉄製ビークルを改良しました。素材は木材を選び、タイヤもひと回り大きいものを選びました。プロジェクター、メディアプレーヤー、ポータブル電源を積んでいます。
（下）秋美にて投影。絵は基本鉛筆で描きます。

社会連携

“こどもアートLab”
植物ってどんなかたち?
なぞって、えがいて、
いけてみよう!

“森”の中で想像力をはぐくむ

秋田公立美術大学
ものづくりデザイン専攻
准教授（専攻長）
瀬沼 健太郎

秋田公立美術大学が主催する小学生対象のアートワークショップ「こどもアートLab」を担当しました。旧秋田県立美術館を改修した秋田市文化創造館を会場に、3回シリーズのワークショップ「植物ってどんなかたち?―なぞって、えがいて、いけてみよう!」を企画。植物を観察して描いてみる回、採集した植物をスタンプにして描く回、この2回のドローイングで完成した高さ10mの大きな8枚の樹木の絵を文化創造館の大空間に展示し、その空間の中でいけばなをする最終回で構成しました。

植物の緑がまだ残る9月にスタートして、11月の紅葉を経て、最終回を開催した12月は少し雪が舞う中で真っ白なキャンバスに黒で描かれた中にツバキをいける。参加した子どもたちには、季節による植物の色彩の変化、空間の色調の変化を感じてほしかったというのがあります。何か正解を教えるというよりは、どうやったら自然をみることや観察することから想像力が加速していくか、日本的な美の精神性に少しでも触れて感じることができるか。それも、ワクワクとちょっとの緊張感を伴って。そんなことに挑戦してみました。

また、私自身が子どものころにこういう体験ができたらよかったなという思いもアイデアの元になっています。この企画を考えついたのは、会場となる秋田市文化創造館を見に来たとき。天井がものすごく高いこの吹き抜けの空間を有効に使えないかな、と上を見上げたときに、ふと自分が森の中で木を見上げたときの感覚がわいてきたのです。森の中って、木々がひしめき合っているのですが、老木や台風の被害とかで木が倒れると、そこだけすこんと抜けて、光の当たり方が変わり植生が変わる。そういった森の空間や風景を、文化創造館の空間の中に見立ててみたいと思ったんです。みんなでつくった森の中で花をいける体験をデザインしてみました。

花をいけるガラスの器は、今回特別につくりました。平たいものだったり、口が小さいつぼ型になっていたり、形はさまざま。子どもたちには、いけばなの型にこだわらずに、バランスゲーム的な感覚で楽しんでもらいたいと思っていました。立たないものは、立たせる工夫をするし、器を観察し、花を観察し、バランスを見つけていく。観察する力を養いながら、自然や植物に対する興味とリスペクトみたいなものを生みだせたら。3回の体験を通して、いけばなが象徴するように、一人ひとりがもつ想像力に気づき、信じてもらえたらと思っています。

子どもたちは、採集した植物をスタンプにし、10mの墨絵を8枚も完成させ、秋田市文化創造館の大広間の天井から吊るして展示しました。吹き抜けの絵の中で一人ひとりツバキをいける体験をしました。

ガラス作家であり、いけ花作家でもある瀬沼健太郎准教授がこの日のために作ったガラスの器にツバキをいけました。絵の空間に一人ひとり、いざないます。

秋田県南部の里山や北秋田市阿仁のマタギによる伝統的な狩猟に参加しながら、秋田の自然から得た実感を絵に。

VOCA展2023「VOCA賞」を受賞した「山衣をほどく」
アクリルガッシュ・岩絵具・熊膠・墨汁・ティッシュ、
カンヴァス・木製パネル（249.5×399×4.5㎝）
横手市のアトリエ「浅舞スタジオ群青」にて。
写真は、本人によると8割ちょっとの完成度の頃。

卒業生
画家
永沢 碧衣
アーツ＆ルーツ専攻
（2017年卒業）
秋田県出身

日本画の岩絵具には、通常は売っている膠（にかわ）を使いますが、里山の有害駆除で捕まった熊の毛皮が捨てられてしまうという現実を知り、今回初めて自分で膠を作りました。熊で熊を描いてみたいな、と。この熊はどういう所で暮らしてきたんだろう、人との暮らしの重なり合いの中で駆除され、たまたま捕まってしまっただけで、この熊が手元に来た経緯は「狩猟」とも意味合いが異なります。

罠に掛かったら出動し、猟友会のみなさんと仕留め、解体するために川床まで持っていきます。まずは口に塩を入れ、お神酒を回しあい、清めてから解体処理が始まります。熊汁を、地元では「うち汁」といいます。「撃った」という意味だと思います。大きな鍋に骨や肉やホルモンなど全部を入れて、味噌と酒で味付けをし豆腐を入れます。みなさん、解体するのも血抜きも上手で、生臭くなどありません。地元では皆で熊に感謝しながら美味しくいただくためにも、必ず綺麗な沢水に身体をさらしながら解体します。この絵はその場面の熊がモデルとなっています。

膠を一から手作りするときは、まず最初に毛皮から余計な毛と脂を取り除きます。そして「原皮」という生皮だけになったものを刻んで、煮込んで、濾していきます。煮込んだ液は冷やすと寒天やコラーゲンのように固まります。これが「膠」です。膠を岩絵具と混ぜ合わせて、描いています。

自分で食べた熊から熊膠を自分で抽出し、それでその熊を描く。これまでは、自然の神域のような、偉大なもの、自然全体を擬人化というか擬熊化して描き出すことが続いてきましたが、これはもう、その「熊」です。その子の中に宇宙があり、秋田がある。その子が暮らしていたであろう風景をその子の影に込めました。

今年で、狩猟免許を取って3年目です。でもまだ、自分の手で熊を授かったことはありません。自分自身その時が来たらと不安になったり、周りのマタギの方々とも、「もしそうなったら描く絵が変わるかもね。」とよく語り合ったりしています。こういう実際の生死を扱ったテーマを描くと、精神的に落ち込むことが多いです。ここ最近の私にとっての「絵を描く」という行為は、楽しいという感覚だけではなくなったのかもしれません。考える時間のほうが長く、絵が完成するまで、感情を引きずり続けてしまいます。これは再来週には完成させる予定で、8割ちょっとです。まだ顔の細かいところとか、家や道路や神社やダムなど人の暮らし、滝や湖をもう少し入れたいと思っています。

口を開けて、舌が出ている赤い部分。唯一、身体の中を出せるのがここかな、と。生々しい所です。印象深いのは橋や川の部分と実際の傷口を重ねて描いた部分です。実際の現場では少しグロテスクな見た目だったのですが、川床で血をさらすとき、猟友会のみなさんが、「かわいそうだなぁ、お化粧しよう」と、葉っぱを取ってきて、傷口にかぶせていました。その行いに人としての優しさや敬意が詰まっていた気がしました。血が流れていくとき、その血が顔に当たっていて。あの場面に自分も熊を殺す側として立ち会いながらも、どこか神秘的なもののように目に映りました。救いたいというか、今では自分が救われたくて描いているのかもしれない、と思います。

猟友会の方々と食べた熊の膠（にかわ）を自ら抽出し、
岩絵具に溶き、その熊の絵を描きました。

社会連携

新屋横断歩道橋補修に伴う色彩デザインプロジェクト

改修される歩道橋で、地域住民と一緒に考えるアートプロジェクト

秋田公立美術大学
ものづくりデザイン専攻
准教授
柚木 恵介

新屋横断歩道橋の補修に伴う取り組みとして、秋田公立美術大学が地域の人々と一緒に考える色彩デザインプロジェクト。1年間かけて毎月1度、地域のお話を聞きながらその時間の「空の色」を選び、塗装に生かします。

最初、秋田県からは歩道橋の改修工事に伴う色彩をデザインしてほしいという相談をいただきました。一色を提案して終えることもできる事業を、あえて地域住民と一緒に取り組む長期間のアートプロジェクトとして提案した背景には、いろいろな考えがありました。

相談を受けて、歩道橋をあえて残す理由を秋田県にヒアリングしたところ、近くの中学校や小学校の通学路として、安全に国道を渡るために歩道橋のニーズが結構あることがわかった。せっかく地域に美大があるのなら、何か地域に残るものになってほしいというような思いが県の人たちにあることも。今回の改修工事で20年くらい塗装がもつと聞いて、20年後に再び歩道橋をどうするかという議論がおこったときに、地元の人たちが自分事として真剣にその議論に加わってくれたらいいなと思って。デザイナーやアーティストが簡単に色を決めてしまうのではなく、地元の人がそういうのに立ち会う機会があると、街を誇らしく思ったりするのではないかという思いもありました。最初プレゼンしたときは、相当驚いていましたね。そこを、美大には人とか行政とか地域をかき混ぜる役割があると説明して、何とか了解してもらえました。

12カ月間かけて、基本的に毎月1日の正午に歩道橋にあがって空の色を定点観測しました。最初は快晴の日が多かったけれど、冬に入ると吹雪の日もあって。

協力者には、カラーチップをお渡しして、「今この目で見えている色を選んでください」と。それだけお願いしました。

町内会の方や、近所のダンス教室の先生や生徒さん、美大生も行きつけの居酒屋「栄月」の息子さんや、地元の女子バスケットボールチーム・アランマーレの選手たち、日吉神社の宮司さんなど、いろんな方に参加してもらいました。即決の人もいれば、30分以上かけて迷う人もいて。色を迷っている最中に聞くエピソードも面白かった。500歳野球チームの方は、たぶん一番選ぶのに時間をかけられたんじゃないかな。ああでもないこうでもないと真剣に考えてくださって。ポジションが外野で、よく空を見ていると伺いました。1月1日に協力していただいた新屋振興会の方からは、1月あたりが毎年一番空の色が暗いんだって教わりました。

1年間、月に1度、正午に新屋歩道橋に上がり、その日の空の色をカラーチップから選び、改修工事の色彩デザインに参加していただきました。

地域の人々が選んだ月に一度の「空の色」

（2022.6.1–2023.5.8）

2022.6.1
新屋参画屋
小野隆三さん、冨野昭雄さん、久光強さん
DIC-428
DIC-44
DIC-423
DIC-N871
DIC-N895

2022.7.1
Running man　阿部歩さん
DIC-548

2022.8.1
日新小　小学生たち7名
佐藤暖乃さん、三浦麗美さん、池田玲依さん、嵯峨悠衣さん、佐藤優香さん、門脇咲花さん、原田愛菜さん
DIC-2190
DIC-579
DIC-421
DIC-F47
DIC-2380
DIC-142
DIC-N877

2022.9.1
秋田西中（2年生）
大山心寧さん、佐藤心絆さん
DIC-2193
DIC-N947

2022.10.1
新屋ガラス工房　作家
東穂高さん、北岡友浩さん
DIC-N869
DIC-2189

2022.11.1
新屋日新クラブ　進藤進さん
DIC-2187

2022.12.8
うちのあかり　小栗帆乃花さん
DIC-N869

2023.1.1
新屋振興会　中野鋼一さん
DIC-652

2023.2.1
アランマーレ秋田（女子バスケットボール）
平松 飛鳥選手、ニアン・ンディ・クンバ選手
髙橋 悠佳選手（3人で1色）
DIC-2196

2023.2.27（3月分）
日吉神社　宮司　石澤千秋さん
DIC-2590

2023.4.1
秋田ノーザンブレッツ（ラグビーフットボール）
夏井 隆一選手（プロップ）
ビリアメ・ソキベタ選手（フランカー）
児玉樹選手（センター）
モセイトゥバ・志雄選手（ウィング）
DIC-2166
DIC-2589
DIC-44
DIC-F39

2023.5.8
栄月　鎌田洋介さん
DIC-2196

秋田市伝統の金属工芸の技術を受け継ぐ、2019年夏に立ち上げられた「矢留彫金工房」。その設立・活動に関わる秋田銀線細工職人。

修了生

銀線細工
矢留彫金工房
髙槝香澄
大学院複合芸術研究科
（2019年修了）
秋田県出身

秋田市の無形文化財、秋田県の伝統的工芸品に指定されている秋田銀線細工は、線状の銀を撚（ねじ）り合わせ、組み合わせて形づくっていく工芸です。

私は秋田公立美術工芸短期大学付属高等学院（現・秋田公立美術大学附属高等学院）で銀線に触れ、長岡造形大学金属工芸学科で七宝焼など異素材との組み合わせを試みました。それでもう一度銀線細工の技術と現状を知りたくなり秋美の大学院に入りました。

「矢留彫金工房」を始めるきっかけは、秋田商工会議所が主催した「銀線細工の企画展 北の燦めき」でした。宝飾店で職人として経験を積んだ現在工房長をしている松橋とし子さんと一緒に作品を展示することになって。私はまだ大学院生でした。その会場に工房のメンバーのもう一人、小林美穂さんが見に来ていました。

工房を開設してすぐの頃は、在庫ができたらこちらからお客様にお知らせする体制という、ほぼ受注のような形で運営していました。しかし、販路拡大に向けて三人それぞれが作って在庫を持てるような定番作品を開発しようと相談し、人気商品「いぶりがっこ」が生まれました。それでも大量に在庫を持つのは今も難しくて、一個作るのに一週間ほどかかってしまいます。有り難いことに注文は途切れずにいただき、対応が追いつかないこともあります。銀が高騰し、材料費でプラマイゼロに近く、手間と伝統を鑑みると価格はもっと高くてもいいのかもしれませんが、少しずつ定番商品を軸に商品展開を広げながら、個人の作りたいものを作っていく体制が出来上がってきています。

銀線細工の伝統的なモチーフはバラなど季節の花のようなモチーフが多かったようです。それから唐草模様など。私たちのお米粒や「いぶりがっこ」をモチーフにしたデザインは、かなり今風にアレンジされています。スパイラルや輪などグラフィカルでシンプルなものも、銀線細工の昔からある商品ではあまり見かけないものです。やはり豪華な見栄えのもののほうが需要があったのですね。基本、帯留めやブローチでしたから。花嫁かんざしなど、特別な時に使うものです。私たちは、そういった晴れの日はもちろん、日常使いができやすいものを中心に作っています。

私たち職人がじかに接客もしています。また、一般の方向けの彫金教室もやっています。教室では銀線細工だけではなく金属工芸の幅広い技術を学びます。火の扱い方や、素材の知識など、基本的な技術と知識を得てから、応用編で銀線細工をやるという流れです。日常的に使い慣れない工具の集まりなので、少しずつ使い方を覚えていきます。銀線細工は繊細できれいですが、火を使う、危ない作業でもあります。高校生対象のワークショップもありますが、今は美大の附属高等学院の生徒に限定しています。高等学院では授業ですでにしっかり学んでいるので、商品化を念頭に、どういった形が使いやすいか、という視点で高校生のうちから制作しています。広報活動もやりがいはありますが、広報をやればやるほど制作の量で対応できていない状態です。銀線細工を作ることが本当に好きです。ずっとやりたいと思っています。

作業しやすい机になっています。夜は電気をつけますが、あまり明るいと、溶接の時に火がよく見えないんです。銀の溶け具合に合わせて火の加減があるので、日中は自然光の中での作業が多いです。

矢留彫金工房は秋田商工会議所や場所を貸していただいている菓子舗榮太楼の社長や秋田の工芸を支援してくださる方の熱意あってこそできた工房です。

❋ 銀線細工が出来るまで ❋

①銀線

「平戸（ひらと）」と呼ばれる渦巻き状のパーツを作るための材料を準備。径0.2～0.3mmの細い純銀線を使うのが「秋田銀線細工」の特徴。

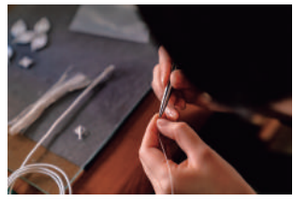
②線撚り

2本の銀線を撚り合わせていく。細かく撚っていくと、1本の白い線に見えてくる。

③ロールかけ

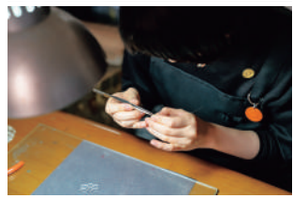
銀線を圧延ローラーに通して平らにしていく。製品によって厚みを変えていきながら、サイズ調整をする。

④枠作り



①で用意した銀線とは別の太さの純銀を用意。径0.5～1mmの銀線で枠を作っていく。

⑤平戸巻き



③で平らに潰した線を指やピンセットを使い渦巻き状に巻いていく。

⑥平戸のはめ込み

枠の形にぴったりと合うように平戸の形を整えていく。純銀はとても柔らかく、すぐに形が変形し傷が付きやすいため慎重に作業を行う。

⑦蠟付け

外枠と中の平戸を溶接するための「蠟付け（ろうづけ）」を行う。接着させたい箇所に「銀蠟」という合金を置いてバーナーで溶かして溶接する技法。火を長く当てすぎてしまうと銀が溶けてしまい、最初からやり直しということも。溶接後は不純物が付いているため、希硫酸で洗い落とし、表面を綺麗にしていく。

⑧磨き仕上げ

「磨きヘラ」という工具を使い、1つひとつ丁寧に手作業で磨いていく。磨くことでツヤを出しながら、硬くしていく。ロウ付けなどの工程で火に当たった銀はとても柔らかく、日常使いが難しいので、ヘラを使った磨きの作業で硬くしていくことが大事。

⑨完成

卒業生シリーズ Vol.9

「秋田銀線細工　髙槇香澄　つむぎつむぐ」

2022年11月1日（火）―11月23日（水・祝）
秋田公立美術大学サテライトセンター
主催：秋田公立美術大学　企画・運営：NPO法人アーツセンターあきた

秋田銀線細工に新しいデザインやアートの視点を融合して制作する髙槇と矢留彫金工房の取り組みを軸に、地域企業との共同開発や秋田公立美術大学附属高等学院生徒作品等を展示。秋田銀線細工の新たな可能性を探り続け、次世代への技術の継承を責務と捉えて活動する髙槇香澄と矢留彫金工房の姿を紹介。

シンプルな形が愛おしい「あきた米」

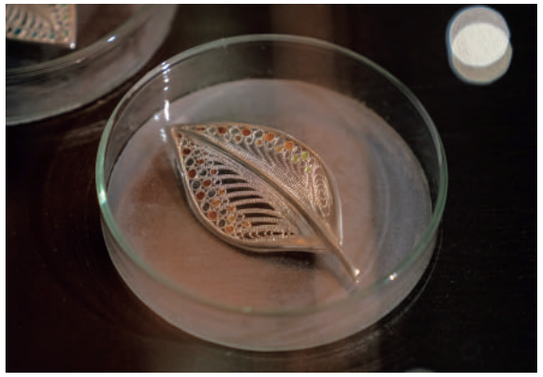
繊細なレース模様の細工が美しいフリーリング「いぶりがっこ」

可憐なスパイラル「くるり」（ピアス）

「唐草」（フリーリング）

株式会社秋田人形会館 雛人形持ち道具（扇）

高校の卒業制作だったばらのブローチ



大学在学中に異素材である七宝焼と組み合わせ、銀線細工の新たな魅力に気づきました。（左）七宝リング（右）ブローチ「vein」

社会連携

秋田県内の木工事業者によるプロジェクト。ORAeアキタファニチャー。

プロジェクト「ORAe」が描く秋田のものづくりの未来

秋田公立美術大学
ものづくりデザイン専攻
教授
今中 隆介

秋田って、実は木材の加工技術がすごいんです。江戸時代からつづく事業者もいて。ORAe（オラエ）は、木材の加工、デザイン、設計、製作を担う事業者のネットワーク型のプロジェクトとして2021年にスタートしました。若手もベテランも入って、世代はバラバラ。参加する事業者は全県に広がっています。

もともとは、世界的なデザイナーの喜多俊之さんが秋田の事業者とはじめた「アキタコレクション」というブランドづくりの礎があって、そこでできたネットワークに僕も加えてもらい、ORAeのプロジェクトが立ち上がった。ORAeとして仕事を受注することもあるし、メンバーのクライアントワークに他のメンバーが協力することもある。ORAeは、県内の事業者がフラットに有機的に共創する、言ってみれば新しい形の現代版ギルドみたいなもの。そこに美大が関わることができているのは、本当にありがたいことです。インターンシップに学生が参加したり、施工現場に立ち会ったり、良い経験を積ませてもらっている。昨年はメンバーの会社に就職した学生も2人います。すごく生き生きと働いていて。学生と事業者の対話によって、新しい概念を持ったプロダクトも生みだしはじめています。

昨年、大館市が主催する東京オリンピック・パラリンピックの選手村ビレッジプラザで使われた県産材をアップサイクルするプロジェクトに美大とORAeが協力しました。全国63の自治体から無償提供された木材をつかって選手村ビレッジプラザを建設し、大会終了後に各自治体で利活用する事業に大館市も参加していて。返却された木材を、市が新しく整備する子どもの遊び場の什器や遊具にしたいという相談でした。子どもたちのための「小さな小さなオリンピックスタジアム」をコンセプトに、年齢差を超えて集った子ども同士が一緒に遊べる空間をデザインしました。一度使われた木材を再加工して什器や遊具を制作するのって、実はめちゃくちゃ大変で、それをスムーズに進める上で、製材や設計などORAeのメンバーがもつ高い専門性が最大限に発揮された。この事業、オリパラのレガシーを継承することを狙っていて、全国の自治体でもいろいろな取組みがあるけれど、大館市が一番ちゃんとしたメッセージをもって対応しているんじゃないかな。

現地に実際に設置にいったときには学生にも手伝ってもらいました。現場で、プロの職人たちがミリ単位で調整していく設置の様子を目の当たりにして、すごく刺激を受けたはず。これからのORAeの活動を通じて、秋田の木工産業の底上げと、美大生を含めて、未来の担い手が憧れるコミュニティづくりができたらと思っています。

大館市と協働で、東京オリンピック・パラリンピック「選手村ビレッジプラザ」の建設に用いた大館市産の木材を再利用し、遊具を制作。
ニプロハチ公ドームパークセンター内の「子どもの遊び場」に設置されました。

「ORAeアキタファニチャー」に参画している株式会社県北パネル（能代市）にて、遊具の制作に再利用できるよう木材を加工しました。
左からORAeメンバーである県北パネルの倉持雄太さん、有限会社萩原製作所（秋田市）の萩原易雄さん、今中隆介教授、県北パネルの倉持美帆さん。

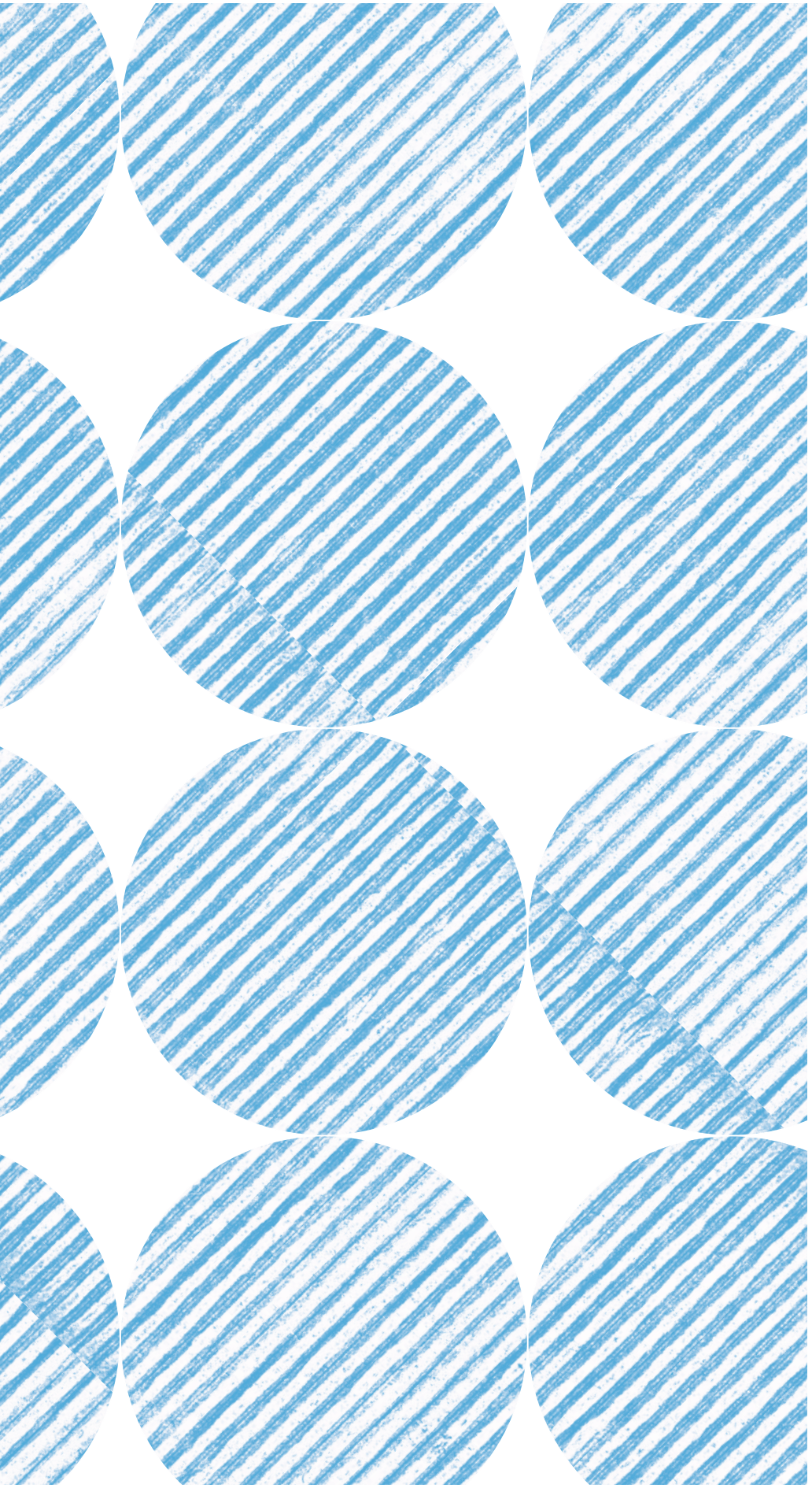
秋田公立美術大学　Extra issue

所在地
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町 12 - 3
JR「秋田駅」から羽越本線「新屋駅」下車 徒歩15分
JR「秋田駅」から秋田中央交通バス・新屋線「美術大学前」下車 徒歩 1 分
TEL　018-888-8100（代表）／018-888-8105（学生募集・入試）
FAX　018-888-8101
E-mail　soumu@akibi.ac.jp（大学）／kyomu@akibi.ac.jp（学生募集・入試）
Web　https://www.akibi.ac.jp/

写真　船山哲郎、伊藤靖史、後藤洋平、草彅裕、早坂葉、大木春菜、中田大介、鄭伽倻

デザイン　佐藤豊
印刷・製本　株式会社シナノパブリッシングプレス
制作　NPO法人アーツセンターあきた

※乱丁・落丁誌はお取替えいたします。
※本誌内容の無断転記、転載、複写はご遠慮ください。
※本誌データは2023年6月現在の情報です。あらかじめご了承ください。



秋田公立美術大学
AKITA UNIVERSITY OF ART